



池田カトリック新聞WEB版

2024年1月号

キリストの受難 カトリック池田教会

主任：中村克徳司祭

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL（ホームページ）：<http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm>



本号の記事の主題など

巻頭言「お正月と典礼暦」 来住英俊 神父

1月のガラスケースのみ言葉と解説

中村克徳 神父

宝塚黙想の家からのお知らせ

待降節黙想会の講話

第16回シノドスはどう変わるのか？

今月の表紙の絵について

みんな笑顔の日曜学校クリスマス会

年に一度の大掃除

みなさん ありがとう ドレミの会から

キリスト者の一年の始まりは待降節第一主日だと言われます。つまり、典礼暦が一年のリズムを決めるのです。しかし、建前はそうであっても、長い間私にとってはお正月の方がずっと親しみがありました。それは子供の頃のお正月が懐かしい思い出として心に残っているからでしょう。

私の家族はお正月だけはきちんと祝いました。大晦日に「紅白歌合戦」、さらに「行く年・来る年」を見て、遅く寝ても、お正月の朝はきちんと起きました。起きると、母が雑煮とおせち料理を座敷に並べていました。一人ひとりの箸は名前の書かれた箸袋に入れて、あらかじめ席に置かれています。家族が皆揃うと、父親があらたまった口調で「新年明けまして、おめでとうございます。今年もよろしくお願ひします」と挨拶して、家族もそれぞれ挨拶を交わします。母は和服を着ていました。子供たちはお年玉をもらいます。その頃の子供はまとまったお金を持てるのはこの時だけです。すぐにもお店に行きたいが、1月2日から3日まで閉めていたので、開くのを待たねばなりません。すべてが非日常的で、厳粛でした。街全体がお正月だったのです。子供は冬学期の成績が芳しくなくても、この時期は誰もそれには触れません。前の年、家族に何か悪いことがあっても、それは水に流して、「今年は良い年になる」と言い合っていました。日本全体が上昇気流だったせいもあるでしょう。私が大学生になり、就職して家を離れた後も、このお正月だけは長く、私の記憶に残りました。「今年は良い年になる」という無根拠な希望が本当にあったのです。31歳でキリ

スト信者になった後も、一年の始まりはやはり「お正月」でした。

それから、お正月はだんだん後景に退き、私にとって典礼暦が意味を増してきました。72歳の今、ほぼ完全に、待降節第一主日が一年の始まりになりました。その理由はまず、日本のお正月が、だんだんに祝祭的な意味を持たなくなったからです。元日の静かな街の雰囲気はもはやない。お店はいつでも開いている。要するに、一年中が同じ日なのです。周囲の雰囲気がそうならなれば、かつての「お正月」を取り戻そうと思っても一人ではできません。

一方、典礼暦を祝うことは一人でもできます。もちろん、教会全体が祝祭的な雰囲気に満ちていれば、大いに助けられるでしょう。しかし、小教区や修道院にその雰囲気がないから、私には何もできないのだという考え方はもうやめようと思っています。典礼暦は毎年のサイクルで、スパイラル状態に少しずつ回心を深めていくものです。そして、今年回心を少し深めることは一人でもできる。ウクライナやパレスチナの苦しみを毎日、ニュースで知らされていますが、私たち日本の庶民にできることはほとんどないかに思えます。しかし、一人が回心を深めれば、世界に及ぶキリストの光はそれだけ輝きを増します。その光は、パレスチナやウクライナの人々も照らすのです。

1月のガラスケースのみ言葉
あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者
マルコ 1章11節

1月のみ言葉についての解説

中村克徳神父

昨年三年半に及ぶ感染症の蔓延が一段落し、これまで通りの生活へと徐々に戻れることに笑みがこぼれたのもつかの間、イスラエルでの紛争が始まったことで、新たな懸念が世界中の人々を憂いの中に引き込む事態となりました。当初はテロの被害に遭ったイスラエルに同情する声が大勢を占めましたが、その反撃の激しさとガザ地区での被害の深刻さが明るみに出ると、直ちに停戦すべきだとの意見が世界中で叫ばれるようになりました。国連の話し合いも各国の思惑によって、停戦や仲裁に入ることが容易ではなく、先行きの見えない事態に陥っています。一刻も早く紛争解決の道が開かれて、現地で苦しむ多くの人々に援助の手が差し伸べられるとともに、命を落とした人々の永遠の安息を祈らずにはられません。

2000年前のイスラエルは、現在と真逆の状況にありました。国を支配しているのはローマ帝国であり、国民はあたかも現在のガザ地区に住む人々のように、明るい未来が見えない生活を余儀なくされていたのです。そのような中で洗礼者ヨハネが現れ、悔い改めの洗礼を人々に呼び掛けました。それは、救い主が間近に迫っているから、これまでの日々の歩みを根本的に見直し、神に向かう道へと生き方を変えるよう、人々を回心に導くためのものだったのです。

そこにイエス様が現れて、ヨハネから洗礼を授かりました。福音書はいずれも、天

が裂けて聖霊が鳩のようにイエス様の上に降ってきたことを告げています。そして、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という父なる神の声が聞こえました。周りには大勢の人がいたと思われませんが、この声はイエス様にしか聞こえず、他の人たちと同様に洗礼を受けたとしか思われなかったことでしょう。ただ一人、洗礼者ヨハネだけは聖霊がイエス様の上に降ってきたことを目撃しています（ヨハネ1章32～34節）。

この出来事を契機に、イエス様は荒れ野に退いて40日40夜の断食苦行を行い、ヨハネが捕らえられた後に、人々へ神の国の福音を宣べ伝え始めました。ベツレヘムでの誕生からエジプトへの避難生活を経て、ナザレで普通のイスラエル人として生きてきたイエス様は、洗礼によって本来の使命である、神の国の宣教へと新たなステップを踏み始めたのでした。

新しい年の始まりは、神様からわたしたちへの新たな恵みを表すものです。わたしたちを取り巻く状況に不安が付きまとうとしても、神に信頼を置いて、イエス様の教えを生き続けるならば、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と父なる神様が応えてくれるに違いありません。この世界が神様の恵みに満ちたものとなるよう、希望を持つことが大切です。この一年を通して、神様の恵みと祝福が皆さんの上にありますように。

待降節黙想会 (12/10) フリオ・トレス神父の講話

『カトリック教会の将来を考える』—新たな形で開かれたシノドスを深める為に—

2023年12月10日（日）待降節第2主日、クラレチアン宣教会のフリオ・トレス神父さまご指導のもと、池田教会にて、待降節黙想会を開催致しました。

フリオ神父さまは、亡くなられた松本神父さまと幼稚園の仕事繋がりでとても親交が深く、亡くなられた今でも大切な友人だとお聞きし、このたびの黙想会はきっと松本神父さまが導いてくださったのだと、お二人のご縁を強く感じた黙想会となりました。

ミサ中の第一講話は、先週の福音の箇所「目を覚ましていなさい」（マルコ13・33-37）とイエス様は3回言われたというところから始まりました。

目を覚ますとは意識する事であり、気付く事であり、わたしたちは罪に気付き回心をする。

罪はこれまで三つに分けられていた。「神に対する罪」「周りの人に対する罪」そして「自分に対する罪」です。

パパさま（教皇フランシスコ）はこれに「自然、被造物、全ての生き物に対する責任」を加えられました。これが『ラウダート・シ』から学んだ新しい視点の回心（エコ回心）です。

私たちはこれらの回心を生きることで、『福音的な存在になること』が大切だとお話し頂きました。

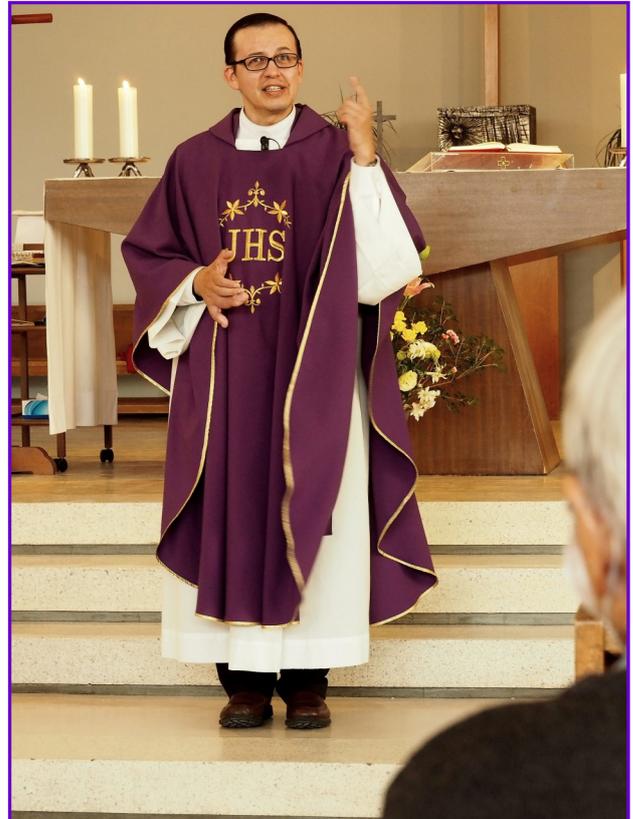
ミサ後の第二講話では、二つのお話を頂きました。

・慰めよ、私の民を慰めよとあなたたちの神は言われる。（イザヤ40・1）

・主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。（マルコ1・3）

池田教会の皆さんの中に、もし「今しんどい」と思っている人いれば私に言って欲しい。また、そのような兄弟姉妹がいることを皆忘れないで欲しい。

■カトリック教会の存在と目的、そして全ての人間の未来について心配です。



パパさまは、（たぶん聖霊に導かれて）『シノドス』という発想をされました。

『シノドス』という言葉、意味は共に歩む、教会の課題をみんなで共有して解決に向けて歩いて行くという意味です。

全ての被造物に対する私たちの回心が必要という『ラウダート・シ』から共に歩むという『シノドス』へとパパさまの思いは続いていきます。

教会としての未来を考える時、私達の教会の基（根）は何処に有るか考えてみる。

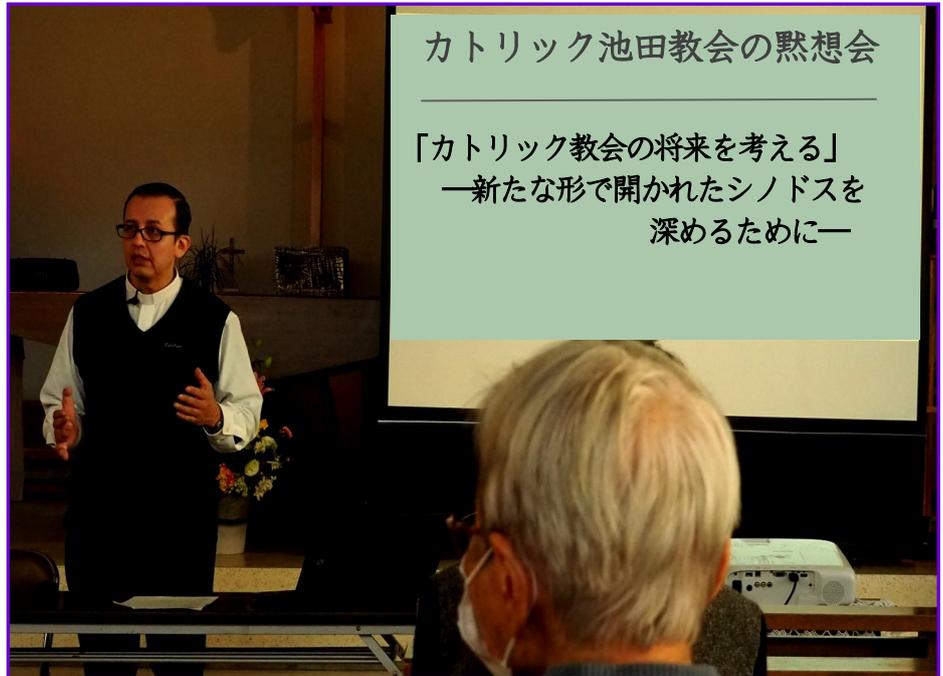
私たちの根を表す言葉には、『ケリマ（福音宣教）』『ディアコニア（奉仕）』『コイノニア（交わり）』という三つの言葉があり、私たち教会はそこから生まれました。

こころを御言葉で満たし、この三つの言葉を共に歩み生きることが教会の未来を形作る事になるとお話し頂きました。

後半は信者と未信者の関係の質問や個人に関する質問など、池田教会の皆さんから頂いた5つの質問にお答え頂き、みんなで笑ったり、納得したり、実りある楽しい時間を共に過ごすことが出来ました。

黙想会が終わり、フリオ神父様の姿が見えなくなった後でも、神父様の声が耳に残り、まだ神父さまがそばにおられるような温かい気分が続き、『御言葉でここを満たす』とはこういうことなのではと感じました。

フリオ神父様、教会の根の部分と未来について、ラウダート・シからシノドスへ続くパパさまの思いについて、熱意を持って、わかりやすくご指導頂きありがとうございました。



ました。

こちらより感謝致します。

研修委員会 釜谷

第16回シノドスは従来のシノドスからどう変わるのか？ 前田万葉大司教や教皇フランシスコは何を目指しているのか？

2022年年頭にあたって前田万葉大司教は大阪カトリック時報に翌年に予定されている第16回シノドスがこれまでと異なる考えで開かれることを紹介された。前年に教皇庁が長文の準備文書と手引きを著して、司教による世界代表司教会議から司教のみではなく、司祭、修道者や信徒などのあらゆる人々が「共に歩むための会議」と位置付け替えをされたことを紹介し、そのテーマは『共に歩む教会のために～交わり、参加、そして宣教』であるのを明らかに提示していたのである。

大阪司教区としてはシノドスのテーマの性格から、信者に向けたアンケート調査の実施など、より多くの信者が参画できるように工夫した、10項目からなる質問表と説明文書を配って、謂わば、大阪教区の「準シノドス」を開くと宣べられました。そして、時報6月号に質問表に対する各小教区か

らの回答が教区シノドス担当チームによって「シノドス意見聴取のまとめ」として、司祭協議会に報告され、承認されています。

それらの詳細は大阪カトリック時報で公表されていますが、小教区や修道会からの共同して回答したものは少数に限られていたからか、眼を見張るような斬新な意見もありますが、330通の回答書をまとめた部分では若年者の司祭と信徒の減少を外国籍の司祭と信徒の増加が補っているが、若年層信徒の落ち込みが活動的な信徒の固定化を産み、若年層に魅力の乏しい空間となっているようです。そこには注目すべきことの第一が、それらの共に歩みである交わり…分かち合い、の中で回答されているのが少数に限られているという事実は、シノドスを準備する段階では大阪司教区でも現実を十分に意識していた方は少数であったけれ

ども、前田大司教ご自身は大阪司教区に於いても、「準シノドス」が時宜を得たことであると年初に時報に記したのです。

一方、教皇フランシスコは2022年8月より個人や共同体組織の様々な現実を踏まえて、眼を覚まして祈るのに役立てられるように、一般謁見演説として14回連続的な識別についての講話を行い、その講話全文がカトリック中央協議会のホームページに掲載されました。筆者の理解は頼りないですが、そこには、個々人の性格や望みを知り、生活場を知って、祈りつつ霊的同伴者と歩むならば、識別すべき事項と識別の機会の多少に差異が出るとして、シノドスに向けて多様な識別を人々と分かち合う事自身がシノドスのテーマの中心的課題の一つとなることを示されました。

2023年年頭にも、前田大司教はシノドスに向けた準備の作業（分かち合い、霊的識別の探求）を「シノドス運動」として継続して、バチカン各司教宛てに教区の全てのカトリック関係者に向けて「共に歩む」の現状と評価、その実現のために大阪司教区、各小教区、各修道会、各カトリック施設、各種会や各家庭などの小共同体で分かち合いと識別がなされるのを重ねて要請されました。

「分かち合い」や「共に歩む」が議論や「単なる対話」と違っているのは異なる二者、例えば神と人、自己と他者との両者の間に新しい関係性が生まれ、生物進化の契機や生物の共生現象と同じように誰の眼にも明らかな行動パターンの転移が起こり得ることです。

それらの新たな関係性が生まれ、二者の

間の距離が小さくなった状態ができた時には、生まれる状態は一方が「何かをする」か「他方にされるか」という主客の拘りを捨てて、両者が共に参画した状態が英語の「LET」やドイツ語の「LASSEN」などを用いて表現されてきました。日本語では「御意のままに」あるいは「お望みの通り」などの表現が使われて、両者が共に参画した状況が生まれたことが表現されます。

処女マリアが天使ガブリエルから受胎告知を聴いた際に発した「Let it be」の場所を示す「it」は神様とマリアが「ともに歩く」象徴的な場所となりました（ルカ1章26～38節）。カトリックの原点の一つである「イエスの復活」は神の強い関与が必須なのであり、三位一体も特別な三者の関係性の存在を意味しています。

識別の要請は人間の知性の貧弱さの現実を知るからこそ、それができる時空を逃さないように自己と現実を目を覚ましていなさいと言われてきました（マルコ13章32～37節）。神ならどうするであろうかと祈ると共に、我が目を見開いて、上記の教皇フランシスコの一般謁見の連続14回に亘る講話にあるように現実についての識別を重ねて、2023年～2024年のシノドスとその後のシノダリティに富んだカトリック教会の動的な姿を見届けたいと思います。

2024年年頭にも、前田大司教が第16回シノドスについて何を語られるかも注目したいと思います。

広報委員会

みんな笑顔の日曜学校クリスマス会

12月17日(日)、日曜学校のクリスマス会を開催しました。コロナが落ち着き、今年は4年ぶりに教会の皆様にも参加していただくことができました。参加者は、小さい子から高校生は18名、青年は6名、大人は40～50名ほどでした。

プログラム内容は、クリスマスのお話のスライド、ゲーム、会場のお客様と子どもたち全員と一緒に中学生のギターや子どもたちの楽器に合わせてクリスマス・ソングを歌い、サプライズで着ぐるみやサンタクロースも来てくれました。その後、温かいホットドッグやお菓子をいただきました。

今回は、企画の段階から積極的に青年たちの参加があり、当日は司会進行やゲームなど、青年リーダーそれぞれが自主的に取り組み大活躍してくれました。夏のキャンプに引き続き、子どもたちと青年リーダー

とのつながりが、より深まったように感じました。

子どもたちや青年、参加して下さった教会の皆様全員が笑顔で楽しいひとときを過ごし、コロナ前のように子どもたちと教会の皆様と一緒に一足早いクリスマスをお祝いすることができましたことをとても嬉しく思います。

最後になりましたが、企画や準備、会場設営、当日の進行や片付けなどお手伝いいただいた皆様、お食事をご準備して下さった地区の皆様、皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

青少年育成委員会

宝塚黙想の家からのお知らせ

- 日帰り黙想会 10:00～15:30
1月25日(木) 指導：染野 治雄 神父
1月26日(金) 指導：山内 十束 神父
- カトリック教会のカテキズム
1月17日(水) 10:00～12:00
指導：染野 治雄 神父
- 聖書の基本
1月17日(水) 10:00～12:00
1月31日(水) 10:00～12:00
指導：山内 十束 神父

上記の各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎ 0797 (84) 3111

今月の表紙の絵について

7日は主の公現の祝日である。イザヤは歌う。「起きよ、光を放て。～あなたを照らす光は昇り、主の栄光はあなたの上に輝く。国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射出するその輝きに向かって歩む」(イザヤ1:1～)

イエスのご降誕を祝うために、東方の3博士は遠路はるばると旅をしてイエスを礼拝した。主の公現とは、イエス・キリストが公に人々の前に姿を現されたことを示している。人々とは異邦人も含む、すべての人々であり、これから人類のために大きな使命を果たされる第一歩となるお祝い日である。

表紙の絵はフランス人のシャルル・アンドレ・ヴァン・ルー(1705～1765)が1760年ごろに描いた油絵で、現在はロサンゼルス郡美術館に収蔵されている。

年に一度の大掃除

毎年一年に一回、みんなで教会の大掃除をします。今年は11月26日の主日ミサのあと、行われました。その日は快晴、快適な気温で、まさに大掃除日和でした。カール記念館の玄関ロビーには、ホワイトボードに掃除すべき箇所が列記され、その下に掃除道具やごみ袋が並べてあります。信徒はどこを担当したいかを自分で決め、散っていきました。

それぞれが思いをこめてごみを払い、磨き上げます。2時間ほどすると、普段は掃除が行き届かないところもほぼすべてすっきりと美しく仕上がりました。仲間と作業する楽しさを味わいながら、教会もきれいになり、一石二鳥ですね。そのあと、みんなで一服して解散いたしました。



みなさん ありがとう！！ ドレミの会のクリスマス会から

12月9日(土)ドレミの会のクリスマス会が行われました！

活動日にお休みがあったり、いつもの時間と変わったので、無事に集まるか心配でしたが時間になると会員と保護者が続々集まってきました！笑顔いっぱい！

初めにみんなの好きなクリスマスの歌をたっぷり歌い、続いてゲストの方がたの演奏、演技に時のたつのも忘れませんでした。

信者の大西さんのご主人率いるにギターサークルの方は10人、豪華な演奏です！ギターの伴奏で、フラメンコのダンス、カスタネットの響きが素晴らしい。タップダンスの皆さんは会員も一緒に巻き込んで明るい見事なステップ！みんなで楽器を使ったりリズム、ダンス、ろうそくの揺れる光の中での、クリスマスのお話、ホールはその後のサンタの登場で、最高潮でした。

私は、このゲストで来て下さる方々は、みなさんがボランティアであることに感動しています。遠方から車や電車を使い、何の報酬もないのに素直に喜びを表す彼らに出会うために、時間とお金と技術を提供して下さるのです。クリスマス会に参加した人数は80名を超えてホールからあふれていました。

いつも一人では安心して行く場の少ない彼ら、比較される社会の中で、将来に不安を抱えながら子供を育てている保護者にとっても、この場所は特別な場所になっているように思えます。

前日の飾りつけを手伝ってくださった方々～

何もできないからと、寄付をして下さる方々～

プレゼントを提供して下さる沢山のみなさん方～

必要なものをいつも快く貸して下さる「マリア幼稚園」～

誕生会のお花を30年間、毎月安く作って

くださる 秀華園さん～

この皆さんの心がこの会を支えてくれているのです。池田教会があるから、この会も30年続いているのです。

先日教会の黙想会の講話でフリオ・トレス神父様がボランティアの大切さを話しておられました。ボランティアは与えるけれど、得ることも沢山あると思います。みなさんほんとうにありがとうございました。来年もスタッフは心をあわせてこの会を守っていきます。応援してください！

ドレミの会 村嶋

編集後記

「モラハラ夫に蔑ろにされつづけた妻の復讐」「陰湿ないじめを受けつづけた学生があらゆる手段を用いて加害者に恐怖を味わわせる」「現世で無能扱いされて何一つ報われなかった主人公が異世界に転生して無双する」

SNSを何気なく眺めているとこんなマンガの広告が流れてきます。これらは人の目を引いてクリックされれば儲かるので、ことさらショッキングな絵を見せてくるわけですが……それにしても「虐げられてきた人間が何らかの力を手に入れて自分を見下してきた加害者を見返す」というストーリーが多い。これらは勧善懲悪とは少々違うように思われます。「自分は正当に認められていない」という鬱屈は現代人の多くが抱えており、このようなマンガでカタルシスを得ているのかもしれない。

聖書にも「報復」に関する記載は沢山あります。古代から同じように虐げられてきた人々は沢山いたのでしょうか。しかし、「報復」を神に任せることができるか、善をもって悪に勝つことができるかが、キリスト者と未信徒を分かつものだと思います(筆者も偉そうなことは言えないのですが…)

パウロ